

委託細胞診での子宮内膜細胞診疑陽性判定の検討

公益財団法人福島県保健衛生協会¹⁾

医療法人徳洲会羽生総合病院²⁾

公立大学法人福島県立医科大学 医学部 産科婦人科学講座³⁾

荒木由佳理 (CT)¹⁾、羽野真貴 (CT)¹⁾、添田喜憲 (CT)¹⁾、佐藤丈晴 (CT)¹⁾、
佐藤奈美 (CT)¹⁾、千葉聖子 (CT)¹⁾、森村豊 (MD)²⁾、小島学 (MD)³⁾、
古川茂宜 (MD)³⁾、添田周 (MD)³⁾、渡辺尚文 (MD)³⁾、藤森敬也 (MD)³⁾

【目的】

当施設の子宮内膜細胞診の疑陽性判定は、体癌から反応性変化まで幅広い所見が含まれる。そこで、今回、子宮内膜細胞診における記述式報告様式導入を目的とし、疑陽性症例を再評価し、細胞像の整理を行った。

【対象および方法】

当施設に委託された子宮内膜細胞診（従来法）で2017～2019年度に疑陽性と判定され、組織診と照合できた72例を対象とした。

細胞検査士5名がブラインドで再鏡検し、細胞所見及び核所見など観察し、1：ATEC-US、2：内膜増殖症、3：ATEC-A、4：異型増殖症以上の4分類に再評価し、各分類と組織結果を対比し、細胞所見を整理した。

【結果】

再評価の結果、ATEC-US 31例（43.1%）、内膜増殖症 14例（19.4%）、ATEC-A 13例（18.1%）、異型増殖症以上 14例（19.4%）だった。

組織結果との照合では、ATEC-USの31例のうち異常なし27例（87.1%）であった。ATEC-Aでは異型増殖症以上が13例のうち7例（53.8%）と多かった。

細胞判定と組織判定の不一致例では、ATEC-USで類内膜癌が1例みられ、これは細胞量が少なくサンプリングエラーによるものと考えられた。異型増殖症と判定して異常なしであった症例は3例あり、そのうち2例は細胞量が多く、乳頭状集塊や化生変化が多い症例だった。

【まとめ】

当施設の疑陽性は、報告書に内膜生検を薦める記載をしている。しかし、疑陽性の約半数はATEC-USであり、組織も多くが異常なしであった。ATEC-USは記述式報告様式において内膜生検を必ずしも必要とせず、細胞診再検を薦めるとされている。今後、記述式報告様式導入にあたり、より詳細なコメントを記載し、臨床側とコミュニケーションを図ることが望まれる。